

2021

ひたち物語

1

Month

Vol.2

～ひたちらしさの数々～

“ひたちのミステリー”



私たちの故郷日立市。

その歴史は古く、約 1300 年前に
編纂された日本最古の書物の一つで
ある「常陸国風土記」には、市内各
地の伝説・伝承等に関する記述が
残っています。また、近年は市内に
点在するパワースポットに注目が集
まり、多くの観光客でにぎわって
います。

古来より受け継がれてきた、自然
環境の豊かさや独自の文化・伝統、
産業、施策など、日立市固有のもの
や、他に比べて独自性・優位性を持
つものを『ひたちらしさ』と呼んで
います。

私たちの身近にあり、日々当たり
前のように感じているこれらの『ひ
たちらしさ』の数々は、魅力的なた
くさんの物語を紡いでくれます。

是非、『ひたち物語』をお楽しみ
いただき、皆さんオリジナルの物語
を紡いでみてください。

ひたちのミステリー

日立市には、遙か昔から現代に伝わるさまざまな
伝説や神話、民話が数多くあります。

奈良時代に編纂された「常陸国風土記」には日立
市に関するたくさんの記述が見られます。また、鎌
倉幕府を開いた源頼朝や室町幕府を開いた足利尊氏
の祖先にあたる「八幡太郎義家（源義家）」にまつわ
る伝説が市内各地に残っています。

今回は、多くの伝説などの中から、特に興味深い
ものを「ひたちのミステリー」としてご紹介します。

あなたの知らないミステリーの世界を、ぜひご堪能
ください。

※本コンテンツは、特定の宗教や主義等を支持するものではなく、
記載されている伝説・伝承等には諸説あることにご留意くださ
い。

目次

こんじきひめでんせつ 金色姫伝説	04
たなぼたいそ 七夕磯	05
かびれ たかみね 賀毗禮の高峰	06
いずみ もり 泉が森	08
しゆくこんせき 宿魂石	09
こま 駒つなぎのイチョウ	10
はちまंतरろうよしえでんせつ 八幡太郎義家伝説	12
すわ みずあな 諏訪の水穴	14



「金色姫伝説」とは、日立市川尻町にある養蚕の神様を祀る蠶養神社にまつわる伝説です。

伝説では、常陸国の豊浦の湊（現在の小貝ヶ浜）に繭の形をした丸木舟が流れ着いたのを、この地に住む権太夫がを見つけ、舟を割ってみると中から美しい姫が現れました。それから権太夫は姫を我が子のように育てましたが、やがて姫は亡くなり、亡骸が繭になりました。姫が亡くなる際には、養蚕の技術を権太夫に伝え、念仏とともに昇天し、その後養蚕はここから広まったと伝えられています。

つくば市の蚕影神社や神栖市の蚕霊神社などにも同様の伝説がありますが、蠶養神社では「金色姫は宝石のような赤い貝の首飾りを身に着けていた」と伝わっており、この赤い貝とは近くの小貝ヶ浜に打ち上がる「サンショウガイ」とされています。

蠶養神社の由来に、「小貝ヶ浜で採れるサンショウガイは悪を除き、穢れを祓い、ネズミが避けるとされ、養蚕家はこの貝を蚕棚に飾った」と記されています。



蠶養神社の金色姫伝説と同様の伝説が残る蚕影神社（つくば市）や蚕霊神社（神栖市）の3社を合わせて、「常陸国三蚕神社」と呼び、中でもここ蠶養神社は日本最初の養蚕信仰の神社であると伝わっています。



茨城百景の一つでもある小貝ヶ浜。この砂浜に赤い小さな貝であるサンショウガイが打ち上がることで、太陽の光を浴びると砂浜全体が赤く輝いて見えたとされています。



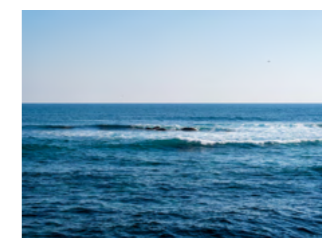
<基本情報>
 【所在地】日立市川尻町 2377 番地
 【出典等】
 ・柴田勇一郎『ひたち地方の伝説—郷愁の伝承誌—』、日立市民文化事業団、1977
 ・柴田勇一郎『日立の伝説』、筑波書林、1985
 ・伊藤正夫・大越斉『ひたちの民話』、ART 楽がき、2009
 ・日立市郷土博物館『日立市民文化遺産ガイドブック』、日立市郷土博物館、2014



「七夕磯」は会瀬漁港の堤防先に引き潮の時にだけ現れ、年に一度の七夕にまつわるロマンチックな伝説があります。

伝説では、「昔、7月のある夜、会瀬の浜が昼間のようになり、若い男女が七色の雲に乗って、沖合の2つの岩に舞い降りた。すると、それまで静かだった波が、この岩を中心にぶつかり合って飛び散り、それが白い雲となって美しく輝いていた。やがて、その雲を透かして、岩の上で仲睦まじくしている男女の姿が見えてきたと。その不思議な出来事に村人は驚き、『今夜は七夕なので彦星と織姫星が舞い降りて、逢う瀬を楽しんだのであろう』と話したのであった」と伝えられています。

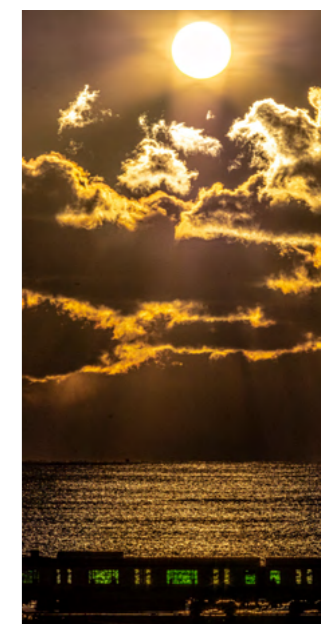
また、七夕磯がある「会瀬」の地名は、常陸国風土記の久慈郡の条の末尾に「昔この地は『遇賀』と名付けられ、それは倭武天皇が皇后とお会いになった場所に由来する」と言われています。このように「出会い」にまつわる言い伝えがあることから、会瀬町には、「七夕磯」伝説が生まれたものと考えられます。



満潮時、七夕磯は海面下に隠れています。潮の満ち引きや波の高さ等の条件が合った時にしか全体を見ることができません。



会瀬漁港のすぐそばを JR 常磐線が通っているため、電車内から会瀬の海を見渡すことができます。また、漁港から少し北上したところに位置する JR 日立駅からも太平洋を望むことができます。



<基本情報>
 【所在地】日立市会瀬町地内（会瀬漁港付近）
 【出典等】
 ・柴田勇一郎『ひたち地方の伝説—郷愁の伝承誌—』、日立市民文化事業団、1977
 ・柴田勇一郎『日立の伝説』、筑波書林、1985
 ・伊藤正夫・大越斉『ひたちの民話』、ART 楽がき、2009
 ・日立市郷土博物館『常陸国風土記にみる日立』、氷川書房、2013



「古来より神々が住むとされる 常陸国最古の霊山」

「賀毗禮の高峰」は、現在の御岩山の古称であり、奈良時代に編纂された常陸国風土記の久慈郡薩都の里の条にも記述が残っていることから、古代より人々の信仰の聖地であったことがうかがえます。

その条には、「薩都（常陸太田市里野宮）からみて、東の大きな山を『賀毗禮の高峰』と呼んでいる」とあります。「この地に立速日男命（たちはやひおのみこと）という神が降り立ったが、村人が大小便を行ったことにお怒りになり、村に災いや病をもたらした。村人はありのままを天皇（すめらみこと）に伝えたと、天皇は片岡の大連（おおむらじ）を派遣した。片岡の大連はこの神を敬い祀り、『どうかここを避けて、高い山の清浄なところに鎮まってください』と祈ったところ、立速日男命は聞き入れて、賀毗禮の峰に登った」という話が伝えられています。

御岩山が、その長い歴史の中で最も興隆した時代は江戸時代であり、1630（寛永7）年、水戸藩初代藩主徳川頼房が御岩山を含め周辺地域に出羽三山を分霊するなど、水戸藩の篤い守護を受け、国峰と位置付けられました。

この時代は、多くの山伏たちが御岩山に入峰※し修験道が栄え、当時の入四間町は門前町として賑わいました。

現在、御岩山のふもとにある御岩神社は、古代信仰や神仏混淆を色濃く残す神社として、独自の文化・信仰を伝えています。

近年は全国有数のパワースポットとして注目が集まっており、多くの参拝客で賑わっています。

※「入峰」とは修験者が修行のために山岳の霊場などに入ること



表参道を登った先に見えるのが「賀毗禮神宮」。水戸黄門として知られる水戸藩第2代藩主徳川光圀は、「大日本史」を編纂するにあたり、ここで「筆初めの儀」を執り行い、特にこの社を信仰したといいます。



御岩神社の御神木である「三本杉（天狗杉）」。根回り10.4m、幹回り8.4m、樹高は約61.3mあり、樹齢は600年以上といわれています。この杉には天狗が住み、罪多き人々を境内へ通さないようにし、村人達より畏れられていたと伝えられています。



御岩神社の創建の時期は不明とされていますが、常陸国風土記に記述があることや、縄文時代晩期の祭祀遺跡が発掘されていることから、古来より人々は御岩山を崇め、信仰がこの地に根付いていたと考えられます。

<基本情報>

【所在地】 日立市入四間町 752（御岩神社 0294-21-8445）

【出典等】

- ・柴田勇一郎『ひたち地方の伝説—郷愁の伝承誌—』、日立市民文化事業団、1977
- ・柴田勇一郎『日立の伝説』、筑波書林、1985
- ・日立市史編さん委員会『図説日立市史』、日立市、1989
- ・日立市郷土博物館『新郷土日立 歴史』、日立市郷土博物館、2007
- ・伊藤正夫・大越斉『ひたちの民話』、ART 楽がき、2009
- ・日立市郷土博物館『常陸国風土記にみる日立』、氷川書房、2013
- ・日立市郷土博物館『日立市民文化遺産ガイドブック』、日立市郷土博物館、2014
- ・茨城県常陸国風土記HP『常陸国風土記を訪ねる』<https://www.bunkajoho.pref.ibaraki.jp/fudoki/visit/33/index.html> (2021/1/26)
- ・御岩神社HP『御岩山』<http://www.oiwajinja.jp/oiwasan.html> (2021/1/26)



泉が森は、奈良時代に編纂された常陸国風土記の久慈郡密筑の里の条に「密筑の大井」として記された歴史ある美しい憩いの場です。

常陸国風土記に、かつてこの場所では「夏の暑き時、遠邇の郷里より酒と肴とをもちきて、男女会集いて、いこい遊び飲み楽しみ。（暑い夏の日、涼しい泉のためとに若い男女がおいしい食べ物やお酒を持って集まって楽しい時間を過ごしていた。）」と記されています。当時から出会いの場であった泉が森は、知る人ぞ知る恋愛のパワースポットとなっています。

白い砂をもくもくと吹き上げながら、こんこんと湧き出る泉の水温は1年を通して13℃前後で、夏は冷たく冬は暖かく、自然の恵みを感じられます。

泉神社の創建は不明ですが、祭神である「天速玉姫命（あまのはやたまひめのみこと）」の「速玉」とは清く澄んだ泉を意味することから、「密筑の大井」が神格化されたものであると考えられています。この湧水は、2008（平成20）年に「平成の名水百選」に認定されています。



泉神社の祭神である天速玉姫命に関わる伝説があり、「はるか昔、この森に神社も泉もない時代に、密筑の里では日照りが続き、雨乞いの祭をしたところ、天から人間の頭ほどの水晶玉が降ってきて、落ちた場所から泉が出た」と伝えられています。



常陸国風土記の書かれた時代から今も、周囲には常緑樹が生い茂り、中央には弁財天を祀る祠があります。



泉神社には、水につけると文字が浮かび上がる「水みくじ」があり、湧水につけるものは全国でも泉神社だけです。

<基本情報>
【所在地】 日立市水木町 2-22-1（泉神社 0294-52-4225）
【出典等】
・柴田勇一郎『ひたち地方の伝説—郷愁の伝承誌—』、日立市民文化事業団、1977
・柴田勇一郎『日立の伝説』、筑波書林、1985
・日立市郷土博物館『新郷土日立 歴史』、日立市郷土博物館、2007
・日立市郷土博物館『常陸国風土記にみる日立』、水川書房、2013
・泉神社 HP『泉神社について』<https://izumi-jinja.com/about.html> (2021/1/26)

「宿魂石」は、一つの石ではなく、大甕神社の境内にある岩山を指しています。この岩山は約5億年前の日本最古のカンブリア紀の地層から成っています。

伝説によると、「日本書紀にある神代に、下総国一宮である香取神宮の祭神と常陸国一宮である鹿島神宮の祭神の二柱が邪神をことごとく平定しましたが、甕星香香背男（みかぼしかがせお）だけは従わず、そこで倭文神武葉槌命（しとりがみたけはづちのみこと）が遣わされ、香香背男の霊力をこの宿魂石に封じ込めた」と伝えられています。

大甕神社の創建は、社伝によれば紀元前660（皇紀元年）。最初は大甕山（現在の風神山付近）上に祀られましたが、1695（元禄8）年、水戸藩第2代藩主徳川光圀の命により現在の地に遷座され、久慈・南高野・石名坂3村の鎮守とされました。

香香背男の荒魂を封じ込めたとされる宿魂石の頂上に武葉槌命を祀る本殿があります。宿魂石の北西側には甕星香香背男社があります。



境内の北側に位置する裏参道の大鳥居。そばを走る国道6号からでも、その巨大な鳥居を確認することができます。



宿魂石の北西側には、香香背男が祀られた社があります。



宿魂石の頂上に位置し、倭文神武葉槌命を祀る本殿（写真左）。本殿を参拝するには、「鎖場（写真右）」を登らなければなりません。



<基本情報>
【所在地】 日立市大みか町 6-16-1（大甕神社 0294-52-2047）
【出典等】
・柴田勇一郎『日立の伝説』、筑波書林、1985
・伊藤正夫・大越斉『ひたちの民話』、ART 楽がき、2009
・日立市郷土博物館『日立市民文化遺産ガイドブック』、日立市郷土博物館、2014
・大甕神社 HP『由緒』<http://omikajinja.sakura.ne.jp/history/index.html> (2021/1/26)



「武家文化を色濃く残す神社にそびえる 巨大な御神木」

「駒つなぎのイチョウ」は、大久保鹿嶋神社の境内南側の高台に立ち、根回りは8m以上、幹回りは約5.6m、樹高は約20m、枝張り約6～11mもあり、樹齢は550年以上と推定されている巨大な御神木です。

駒つなぎのイチョウという名前は、801（延暦20）年頃、当時の征夷大將軍であった坂上田村麻呂が、蝦夷征伐の折、この大久保鹿嶋神社に戦勝を祈願した際、イチョウの木に駒（馬）をつないだという伝説に由来します。

イチョウは雌雄異株の樹木であり、このイチョウは雄株で実をつけません。幹の中心は空洞もみられますが、太い幹が数本出て巨木に生育してきた様子が分かります。1969（昭和44）年に茨城県の天然記念物に指定されています。

また、大久保鹿嶋神社では、400年以上続く神事流鏝馬が毎年10月29日に行われています。河原子海岸で身を清めた後、神社前で流鏝馬が行われ、魔を祓い五穀豊穡を願います。流鏝馬は、参道一の鳥居前の県道（かつて馬場があった）約300mの区間で馬を馳せながら的を射るものですが、現在は参道にて、馬丁に引かれて歩いている馬の上から射手が的を射ます。併せて行われる弓道演舞も見応えがあります。この「鹿嶋神社流鏝馬」は、2019（平成31）年1月24日に市無形民俗文化財に指定されました。

また、8月には祭頭祭（万燈祭）なども行われています。



中世に茨城県北地方を支配した佐竹氏からの崇敬が厚く、神事流鏝馬は佐竹氏が奉納したことが始まりと言われ、以後現在まで続いているものです。流鏝馬は鎌倉時代から武士の訓練として行われていましたが、現在も行われているのは県内でも数箇所のみです。



田村麻呂が、東北地方の平定後、戦勝を祈願した大久保鹿嶋神社に神殿を寄進したという言い伝えもあります。また、市内に数多くある鹿嶋（鹿島）神社の中で最も古いと言われています。



写真は、紅葉のシーズンも終わりに近い2020（令和2）年12月下旬頃に撮影されたものですが、太い幹から伸びる枝には、まだ色鮮やかなイチョウの葉が残されていました。樹齢550年以上とは思えない、たくましい姿は訪れる人々に感動と癒しを与えます。

<基本情報>

【所在地】日立市大久保町2-10-16（大久保鹿嶋神社 0294-33-2025）

【出典等】

- ・日立市史編さん委員会『新修 日立市史 上下巻』、日立市、1994
- ・日立市郷土博物館『日立市民文化遺産ガイドブック』、日立市郷土博物館、2014
- ・日立市教育委員会『説明版』
- ・茨城県教育委員会HP『県指定文化財（天然記念物）』<https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/tennen/14-38/14-38.html>（2021/1/26）
- ・茨城県HP『名木・巨樹』<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/rinsei/morizukuri/moridukuri/meiboku-kyozyu/ityo.html#ityo4>（2021/1/26）

「天下一と謳われた武将にまつわる “奇岩”の数々」

日立市の各所には、平安時代後期に活躍し、後に鎌倉幕府を開いた源頼朝みなもとのよりともや室町幕府を開いた足利尊氏あしかがたかうじなどの祖先に当たる「八幡太郎義家」こと源義家にまつわる伝説が数多く残っています。

中でも市内各地に点在する“奇岩”は、義家が勇猛な武将であったことを後世に物語っています。

奇岩の一つに「太刀割石」があります。この岩は市内で最も標高の高い堅破山（標高 658 m）にあります。堅破山は大昔から神の山として崇められており、常陸国風土記に登場する黒坂命くろさかのみことが凱旋途中で病に倒れた地、義家が奥州征伐へ向かう時に戦勝祈願した地と伝えられています。

伝説では「義家が奥州征伐に向かう途中に黒前山くろさきやま（現在の堅破山）に登り、黒前神社に戦勝を祈願しました。その夜、義家は気高い老人から大太刀を授かる夢を見て、目を覚まし枕元を見ると、夢のなかで老人から授かった太刀が置いてありました。その太刀を手に取り、目の前にあった大石めがけて太刀を振り下ろしたところ、その大石は真っ二つに割れ、片方は転がり、もう片方は大地にめり込んだ」と伝えられています。後に、この地を訪れ、太刀割石を見た水戸藩第2代藩主徳川光圀は「最も奇なり」と驚いたと言われています。

このほかにも、太刀で割ったと伝えられる「手割石てわりいし」や石に弓矢を射かけて真っ二つに割ったという「矢筈石やはづいし」など、義家の勇猛さを現在に伝える不思議な石が眠っています。



<p><基本情報></p> <p>【所在地】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太刀割石：日立市十王町黒坂地内 ・烏帽子石： // ・手割石：日立市南高野町地内（南高野鹿島神社境内） ・矢筈石：日立市折笠町 987-1 <p>【出典等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日立市史編さん委員会『図説日立市史』、日立市、1989 ・日立市郷土博物館『新郷土日立 歴史』、日立市郷土博物館、2007 ・伊藤正夫・大越斉『ひたちの民話』、ART 楽がき、2009 ・日立市郷土博物館『常陸国風土記にみる日立』、氷川書房、2013 ・日立市郷土博物館『日立市民文化遺産ガイドブック』、日立市郷土博物館、2014 ・日立市 HP『日立市の観光案内』https://www.city.hitachi.lg.jp/kankou/008/p001092.html (2021/1/26)
--



義家が堅破山に参拝したときに被っていた烏帽子にちなんで命名された「烏帽子石」です。このほかにも、義家が腰を休めた「壘石」、義家の手形に似た「手形石」など、堅破山では義家にまつわる数多くの奇岩を見ることができます。



義家が奥州征伐に向かう道中、道の真ん中にあった邪魔な石を太刀で割ったと伝えられている「手割石」。現在は、南高野町にある鹿島神社境内にあります。



義家が奥州征伐に向かった折、弓矢を射かけて真っ二つに割ったとされる「矢筈石」、別名「弓弦の石」とも言います。石が二つに割れている形が弓を張る矢筈に似ていることに由来します。この石は、折笠町にある折笠スポーツ広場の入り口に鎮座しています。



「信州諏訪湖へ続くとされる 清水湧き出る鍾乳洞」

諏訪の水穴（別名 ^{しんせんどう} 神仙洞）は、緑豊かな自然に囲まれた清水が湧き出る ^{しょうにゅうどう} 鍾乳洞です。この一帯は石灰石が分布しており、鍾乳洞が形成しやすい場所でもあります。諏訪の水穴は、東穴と西穴があり、東穴の入口は底辺 2.5 m、高さが 1.8 m でほぼ三角形の形をしており、奥行き 15 m ほどまでは立ったままで進むことができ、内部で ^{しょうにゅうせき} 鍾乳石や石筍なども確認できます。

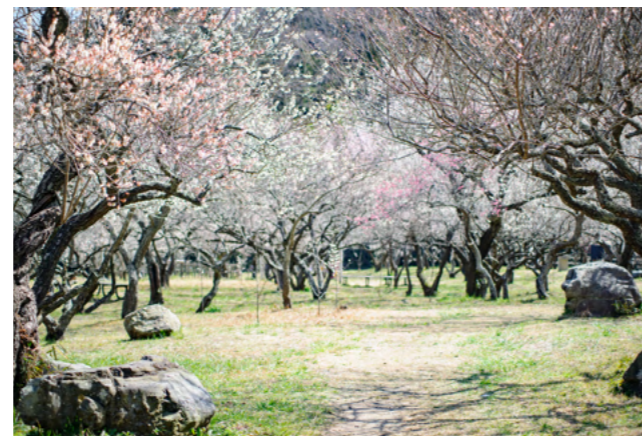
この水穴には「1249～1255（建長年間）年の頃、信州諏訪大社（現在の長野県諏訪市）の神人で、諏訪町にある諏訪神社の神官となつた ^{まんねんだゆう} 万年大夫藤原高利が、この地に起こる災害は信州諏訪湖に通じるとされる水穴が関係すると聞き、この水穴を調べることにし、万が一のことを考え夫婦像を刻み、決死の覚悟で水穴に入ったが、再び帰らなかった」という伝説があります。

1690（元禄3）年に水戸藩第2代藩主徳川光圀が諏訪神社に奉納したとされる神像の背部に「夫婦像が腐朽していたため、新たに2像をつくらせて体内に蔵した」と刻まれており、1973（昭和48）年の調査の際に、光圀の命によって作られたこれら2像の体内から、伝説で伝わる藤原高利が自ら彫刻した古い夫婦像が見つかりました。

新旧4体の像を「^{もくぞうまんねんだゆうふうふざざう} 木造万年大夫夫婦坐像」といい、1974（昭和49）年に茨城県の指定文化財に指定されました。現在、この夫婦坐像は日立市郷土博物館で常設展示されるとともに大切に保存されています。



この水穴の中に徳川光圀も入り、奥にある「三の戸」と呼ばれる場所に「これより奥には入らぬように」と記したと伝えられています。



諏訪の水穴の近くを流れる鮎川沿いには、水戸藩第9代藩主徳川斉昭が造営させたといわれる「諏訪梅林」があります。梅林内には約300本の梅が植えられ、たくさんの人が訪れる憩いの場となっています。



提供：日立市郷土博物館

前列の2像が藤原高利が刻み残した像、後列の2像が光圀の命によって作られた像です。光圀奉納の夫像は像高60cm・坐幅49cm、婦像は像高51cm・坐幅49cmで、藤原高利が残した夫像は像高27.5cm・坐幅21.5cm、婦像は像高23.5cm・坐幅19cmとなります。

<基本情報>

【所在地】日立市諏訪町地内

【出典等】

- ・日立市史編さん委員会『新修 日立市史 上下巻』、日立市、1994
- ・日立市郷土博物館『日立市民文化遺産ガイドブック』、日立市郷土博物館、2014
- ・茨城県教育委員会HP『県指定文化財（彫刻）』<https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/tyokoku/3-109/3-109.html> (2021/1/26)
- ・日立市郷土博物館HP『日立市指定文化財』<https://www.city.hitachi.lg.jp/museum/page/bunnkazai.html> (2021/1/26)
- ・環境を守る日立市民会議諏訪の水穴復元記念協賛会『説明版』

Twitter



Facebook



Instagram



YouTube



御岩山山頂付近からの景色

2021.1 発行

ひたち物語～ひたちらしさの数々～“ひたちのミステリー”

日立市市長公室

シティプロモーション推進課

茨城県日立市助川町1-1-1

TEL 0294-22-3111 内線 314

MAIL kochocp@city.hitachi.lg.jp

HP <https://www.city.hitachi.lg.jp/citypromotion/>

【アンケートご協力をお願い】



ご覧になった感想等をお聞かせください。